特集：オープンアクセス

オープンアクセスをウォッチする 10 大ツール

三根　慎二*

オープンアクセスに対する社会的関心の高まりや，その促進を後押しする欧米政府・研究機関による政策・制度の策定が続いている。オープンアクセス関連の情報は大量に流通し続けており，一人ですべてを発見し読むことはもはや不可能である。よって，情報収集の負担を軽減しより効率的にするためには，何らかの方策が必要となる。本稿では，オープンアクセス関連の情報を収集するための重要な 10 大ツール（人，イベント・学会・各種委員会，Twitter，メーリングリスト・メールマガジン，ブログ，Web サイト，ソーシャルブックマーク，ニュースレター，雑誌，図書）を紹介する。

キーワード：オープンアクセス，学術情報流通，機関リポジトリ，情報収集，情報発信，情報源

1. はじめに

オープンアクセスに対する社会的関心の高まりや，その促進を後押しする欧米政府・研究機関による政策・制度の策定が続いている。オープンアクセスは世界的な動きであり，日本の各関係者が今後の活動の方向性を見いだし，意思決定するためには，継続的に国内外の関連情報を入手し，動向把握を行うことが，最も基本的な作業だと言える。しかし，オープンアクセス関連の情報は大量に流通し続けており，一人ですべてを発見し,読むことはもはや不可能である。よって，情報収集の負担を軽減しより効率的にするためには，何らかの方策が必要となる。

本稿では，オープンアクセス関連の情報を収集するための重要なツールを，大まかな情報の発生の流れに沿って 10 個紹介する。まず，オープンアクセス関連の情報を入手するという観点から，各ツールの特性について述べる。次に重要な情報源はその大多数が国外の関係者によるものであるため，それらについて言及した後に，国内の情報源という順番で紹介する。なお，一つのツールだけでも参照すべき情報源は膨大にあるため，紙幅の関係上ここではその中でも重要な情報源についてのみ解説し，網羅性は考慮しない。紹介する情報源はすべて一般公開されているものであり，私的に閉じたグループ内で運営されているなど一般的にアクセスできないものは対象外としている。

2. オープンアクセスをウォッチするための 10 大ツール

2.1　人

オープンアクセスは「運動」と言われるように，推進派・反対派にかかわわらず特定の人物による発言や行動には大きな影響力があり，オピニオンリーダーとしての役割を果たしている。人は情報の発信源であり，ある意味で一番重要な情報源である。予めそれらの人物を知っておくことが，2 以降で紹介するツールを利用する際に，情報の取捨選択の基準として役に立つ。

ここでは，理念的な牽引者かつ活発な発言者として，「Stevan Harnad」氏[1]，「Peter Suber」氏[2]，「John Willinsky」氏[3]の三名を中心に紹介したい。Stevan Harnad 氏（スティーブン・ハーナッド）はサウサンプトン大学の認知科学者で誰もが認めるオープンアクセスの提唱者である。1990 年代前半から「転覆計画」[4]などを発表するなど，現在まで途絶えることなくオープンアクセス実現のための発言・活動を精力的に行っている。Harnad 氏は，機関リポジトリへのセルフアーカイブとオープンアクセス義務化方針を強く主張しており，オープンアクセスに対する立場は非常に明確であるが，かえって議論を呼び起こすことが多々ある。Peter Suber 氏（ピーター・スーバー）は，アーラム大学の哲学者で，オープンアクセスでは最も有名なブログ「Open Access News」の管理者である。John Willinsky 氏（ジョン・ウィリンスキー）は，スタンフォード大学の教育学者で，「Access Principles」の著者および Open Journal System の開発を行っている Public Knowledge Project の責任者としても有名である。スタンフォード大学教育大学院に異動後まもなく，同大学院でのオープンアクセス方針の施行を実現させている。

日本では，千葉大学の土屋俊氏を中心とする科研費プロジェクト「REFORM」[5]のメンバー，慶應義塾大学の倉田敬子氏を中心とする科研費プロジェクトのメンバー，文部科学省（以下，文科省）の学術情報基盤作業部会の委員[6]，国立国会図書館（以下，NDL）の科学技術関係資料整備審議会委員[7]，国立情報学研究所（以下，NII）の図書館連携作業部会委員は，頻繁にオープンアクセスに関する発言，発表，講演，執筆を行っている。

2.2　イベント・学会・各種委員会

オープンアクセス関連のイベント・学会・各種委員会も，

＊みね　しんじ　名古屋大学附属図書館研究開発室
〒464-8601　愛知県名古屋市千種区不老町
Tel. 052-789-5699
（原稿受領　2010.02.22）

最新の情報を入手するために欠かせない情報源である。最近では，発表スライドやビデオがウェブ上で公開されていることも増えており，情報入手という点だけからみれば，もはや直接参加を必要としないものも散見されるようになっている。しかし，成果（特に日本の成果）の発表，個人的あるいは国際的なネットワークを構築するためには，これらの会議に参加することの重要性は依然としてある。

「Open Repositories」[8]は機関リポジトリに関する最大規模の国際会議である。2006 年以降 4 回実施されており，研究開発の性格が強い。大きく一般セッションとユーザグループセッションに分かれており，後者ではリポジトリソフトウェア別（DSpace，EPrints，Fedora）にセッションがあるのが特徴である。

「ベルリン会議」[9]は，オープンアクセス三大宣言（いわゆる BBB 宣言）の一つであるベルリン宣言が起草された 2003 年にベルリンで開催されて以来，毎年行われている国際会議である。Open Repositories とは違い技術色は高くなく，世界的動向・制度・出版などのテーマが扱われることが多い。2010 年度は北京で行われることが決まっており，初の欧州外での開催となる。

「SPARC Digital Repositories Meeting」[10]は，日米欧の SPARC が主催する比較的新しい国際会議である。アメリカの大学の報告を中心に，付加価値サービスや大学出版戦略などのテーマが設定されている。第 3 回目の会議は 2010 年 11 月に行われる。

「Open Access Week」[11]は，10 月のある一週にオープンアクセスの啓蒙活動を行う世界規模のキャンペーンである。主に，世界中の大学図書館がイベントを行うなどしている。2009 年には日本でも，NII や My Open Archive など中心となってイベントが行われた。

国内では，NII によるイベントが重要な役割を果たしている。特に，「SPARC Japan セミナー」[12]，「CSI 委託事業報告交流会」[13]をおさえておきたい。

NII の学術機関リポジトリ構築連携支援事業（IRP）の CSI 委託事業による Digital Repository Federation（DRF：ダーフ）も，各地域でのワークショップや国際会議を主催しており，国内での機関リポジトリに関する情報共有・意見交換を促進し，成果の発表の場を広く提供するものとして重要な役割を果たしている[14]。秋に行われる「図書館総合展」[15]でのセミナーでは，国内外から著名な人物を講演者として招待しており，情報交換の貴重な場となっている。

委員会では，「文部科学省科学技術・学術審議会学術分科会研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会」[6]が重要である。国内の有識者による議論が継続して行われており，これまでに「学術情報基盤の今後の在り方について（報告）」[16]，「大学図書館の整備及び学術情報流通の在り方について（審議のまとめ）」[17]が発表されている。報告書はもちろんのこと，部会の議事録も文部科学省のサイトで公開されおり，報告書にまとめられるに至った議論を知ることができる（希望をすれば傍聴可）。他に，「研究環境基盤部会」[18]および NDL の「科学技術関係資料整備審議会」でも，オープンアクセスが議題となることがある。

2.3 Twitter

最近では，Twitter（ツイッター）を利用して情報発信を行っている人・機関などもあり，1 手段として試行されている。新しいメディアであるため，その評価はまだ定まっておらず，情報発信の手段としては以下のメーリングリストやウェブサイトとの明確な差が見えにくいが，研究者（AmSciForum[19] など），出版者（PLoS[20]，BioMedCentral[21]，ElsevierNews[22]，library_zone[23] など），組織（JISC[24]，WellcomeLibrary[25]，ca_tweet[26]など）などが Twitter を利用している例も散見されるようになっており，今後の使われ方に可能性があるツールである。

国内外のイベントや会議などで「tsuda る（つだる）」，すなわち「セミナーやシンポジウムなどの会場にノートパソコンを持ち込み，登壇者の発言や議論の流れをツイッター上で中継する行為」[27]も散見されるようになっている。Twitter を利用することによって直接参加をしなくても，ある程度の内容を把握することができるようになったのは非常に便利である。

2.4 メーリングリスト・メールマガジン

新しい情報の告知とあるテーマに関する議論の場として機能しているのがメーリングリスト・メールマガジンで，ほぼ毎日何らかの情報が流通しており，頻度という点ではかなり高いツールである。

「American Scientist Open Access Forum」[28]は，Harnad 氏が管理者を努めているもので，1998 年から運営されている最も投稿数が多いメーリングリスト（ML）である。今現在でも継続して情報提供と議論が行われている希有な ML である。ML の紹介文には，機関のオープンアクセス方針に関心を持つ大学・研究機関の政策立案者向けと書かれているが，扱われるトピックは多岐に渡る。Harnad 氏からのメッセージが極端に多く，それに対して登録者が議論を交わすという形態が典型的である。

「SPARC Open Access Forum」[29]は，Suber 氏が管理者を務める ML である。投稿されるメッセージは，オープンアクセス関連のイベントやニュースの告知が多く，あまり議論が生じることはない。Suber 氏が主な投稿者であり，重要なニュースや他の ML で流れた情報を，この ML で知らせることが多く，扱われるトピックは若干出版関係のものが多いように思われる。

「JISC Repositories」[30]は，JISC が運営している機関リポジトリに関する ML である。イベント告知が多いが，機関リポジトリの運営構築に関する議論がなされることも少なくない。名称が示すように，特にイギリスやヨーロッパ諸国からの投稿者で占められているのが特徴で，海外の動向を把握するのに役に立つ。アメリカの「SPARC-IR」[31]もあるが，あまり活発ではない。

日本では，DRF が運用している機関リポジトリに関する

ML「機関リポジトリの設立・運営に関する公開メーリングリスト」[32]がある。JISC Repositories の日本版のような位置づけで，イベントなどの告知よりもあるトピックに関する議論が展開されることが多い。国内では機関リポジトリ関係の最も重要なメーリングリストであると考えられる。日本国内で機関リポジトリに関心があるものは登録必須の日本語でやり取りができる貴重な ML と言える。

NDL によるメールマガジン「カレントアウェアネス-E」[33]でも，オープンアクセスに関する記事や書評が掲載されることが多い。

2.5 ブログ

ブログは，研究者，図書館員，図書館，出版者，研究助成機関など多様な関係者が設置している点，情報の独自性・更新頻度という点で，有用であると思われる。種類としては，主にニュース系と論評系に分かれる。

「Open Access News」[34]は，オープンアクセスに関心があるものにとっては，最も重要なニュース系のブログである。Suber 氏によって運営されているブログで，オープンアクセスに関する情報源を入手する際に最も重要かつ頻繁に更新される情報源であった。大半のブログ記事は短い引用・紹介と参照元 URL に留まるが，重要だと思われるものに対しては Suber 氏のコメントが付与されるので，その記事だけを見れば良いという，一種の情報のふるい分けもできる。かつては，このブログを閲覧していれば必要不可欠な情報は全て入手できたが，Suber 氏のハーバード大学 Berkman Center for Internet & Society フェロー就任より，2009 年以降は更新頻度が大幅に低下しているが，今後復活する可能性もある。過去のアーカイブ記事も重要な情報源であり，後に「ソーシャルブックマーク」で述べる「Open Access Tracking Project（OATP）」で，Suber 氏は継続して情報やニュースを記録しており，最新情報を確認することができる。

「DigitalKoans」[35]は，Chales Bailey Jr 氏が運営しているニュース系ブログである。Bailey Jr 氏は，書誌「Open Access Bibliography : Liberating Scholarly Literature with E-Prints and Open Access Journals」や「Scholarly Electronic Publishing Bibliography」を刊行していることで有名であるが，これらのもとになる情報をブログで公開している。扱う内容はオープンアクセスだけにとどまらないが，このブログだけが先行して記事にしている情報もあるため，チェックしておく価値のあるサイトである。

「Open and Shut」[36]は，ジャーナリストの Richard Poynder 氏が開設している論評系ブログで，特に「The Open Access Interviews」が有用である。これは，オープンアクセス関係の重要人物に対して行ったインタビューを載せており，彼らの個人的背景やオープンアクセスに対する理念な背景をかいま見ることができるほぼ唯一の情報源である。

「Scholarly Kitchen」[37]は，米国の学術出版協会（Society for Scholarly Publishing : SSP）が設置している論評系ブログである。特に，オープンアクセス関係では，Philip Davis 氏による記事が重要である。一般的に Davis 氏の記事は，一見正しそうな根拠を伴わないあるいは不十分なオープンアクセス推進の意見に対して批判的であり，実証的なデータを用いて議論を展開する記事が多い。2009 月 4 月 1 日の記事では，「シュプリンガー・エルゼビア・ワイリーブラックウェルが合併して究極の出版社『SPEW』を立ち上げる」というエイプリルフールで多くの関係者をだますことに成功するなど，ユーモアもある（Davis 氏に対する評価の裏返しと言える）。

日本では，「Academic Resource Guide」[38]と「Open Access Japan」[39]がある。「Academic Resource Guide」は岡本真氏によるもので，特に国内の新しい情報源やイベントの紹介が毎日なされており，非常に有用である。「Open Access Japan」は，先述の土屋氏と倉田氏それぞれの科研費プロジェクトによる共同企画で，主に筆者が両者の助言を受けながら 2005 年より運営管理を行っている。日本語によるオープンアクセスに関する情報源・議論の場を提供することが最大の目的である。ブログだけではなく，日本語のオープンアクセス関連の文献リスト，プロジェクトのメンバーによる発表資料のスライドなど，他では入手できないコンテンツを提供している。最近は更新頻度が落ちているのが難点である。

2.6 Web サイト

Web サイトといっても対象は非常に広く，他のツールと重複して多様な役割を果たしているため，一般的に特徴づけるのは難しいが，ここでは，公的組織が情報共有・提供を主な目的として設置しているものに限定する。以下の Web サイトで公開される報告書や論文など一次的な情報は，他のツールで紹介される出来事の情報元となることが多い。また，データベースなどの二次的な情報源としても重要な役割を果たしている。

組織では，イギリスの「JISC」[40]と「Research Information Network（RIN）」[41]，アメリカでは「SPARC」[42]のウェブサイトは定期的に確認しておきたい。これらの組織は，オープンアクセスのアドボカシーや機関リポジトリへの研究助成を行っているため，機関リポジトリ関連のプロジェクト成果報告書など各種報告書が頻繁に公開されるためである。

ディレクトリ系のサイトでは，「Open Access Directory」[43]があるが，これはシモンズ・カレッジの Robin Peek 氏が中心となって運営している Wiki ベースのディレクトリである。ある意味，本稿をより網羅的にしたサイトである。主なコンテンツは，オープンアクセス関連のブログ，ML，動画音声，イベント，教材，主題リポジトリのリストなど，合計 47 項目が提供されている。ユーザ登録をすれば誰でも編集可能である。

「Registry of Open Access Repositories」[44]と「OpenDOAR」[45]は，世界に存在する機関リポジトリのディレクトリである。機関リポジトリの設置数（全世界・国レ

ベル）の参照サイトとして頻繁に言及されるため，機関リポジトリの設置後はこれらのサイトに登録することが欠かせない。

日本では，NII の「学術機関リポジトリ構築連携支援事業（IRP）」[46]と「DRF」[14]の Web サイトが，情報源として役に立つ。IRP の Web サイトでは，「JAIRO」[47]，「IRDB コンテンツ分析システム」[48]などのツールや海外で公開された比較的重要な報告書や論文の和訳が掲載されている。

ニュースサイトとしては，JST の「STI Updates 学術情報流通ニュース」[49]と NDL の「カレントアウェアネス-R」[50]の二つが欠かせない。ニュースの情報源は，本稿で紹介したもので多くを網羅していると考えられるが，日本語で読める点と読者層の拡大という点で大きな価値がある。英語の最新情報を追いかけることが負担に感じるのであれば，この 2 サイトは必ず確認すべきものである。

2.7　ソーシャルブックマーク

ソーシャルブックマーク（SBM）は，他と比較して一般的なツールとは必ずしも言えないが，「ブログ」の Open Access News の箇所で述べた理由および以下で説明する理由から，現在では SBM の重要性が高まっていると考えられる。共通の関心を持つ不特定多数の人間が協同で行うため，多様な観点からの情報が集まる点が利点だろう。

Suber 氏は更新が滞るようになった「Open Access News」の代替ツールとして「Open Access Tracking Project（OATP）」[51]を立ち上げることで，世界中のオープンアクセス関連の出来事を網羅的に追跡できるようなプロジェクトを開始した。これは，ソーシャルブックマークサービスの Connotea を利用することで，世界中のオープンアクセス関係の情報の収集を同プロジェクト参加者のソーシャルタギングにより実現するものである。参加は誰でも可能で，Connotea に会員登録（無料）をし，ブックマークするウェブサイトにタグ「oa.new」などを付与するだけである。現時点では，最新情報の規模・網羅性という点では，「Open Access News」よりも「OATP」が最も高い。オープンアクセスの動向を常に把握する必要があれば，OATP のソーシャルブックマークを確認することが必要である。

日本では，OATP のように組織的な動きはないようだが，ツールとしては「はてなブックマーク」[52]が有名である。日本語で書かれたブログ記事の確認に役に立つ。

2.8　ニュースレター

情報の量や深さという点で，ブログと雑誌の中間的位置にあるのが，ニュースレターである。数はそれほど多くはないが，比較的新しい情報を整理された形で入手できる点が便利である。

「SPARC Open Access NewsLetter」[29]は，Suber 氏が SPARC の援助を受けて毎月発行しているもので，1）オープンアクセス関連の 1 トピックについての解説・論考記事および 2）ひと月に起こった出来事のリスト（Round Up），からなるニュースレターである。取り上げられるトピックは，Suber 氏の関心に寄っているが，その時々で話題になっているものを考察しているものが多い。SPARC からは，他にも「SPARC enews」[53]も刊行されている。

「Scholarly Communications Report」[54]は，学術情報流通関連の出来事の紹介・解説記事を載せている有料（一部無料）の月刊ニュースレターである。扱われる記事は，他のツールで扱われたトピックが掲載されることが多いが，何が重要なトピックであるかを判断する指針となり得るニュースレターである。

日本では，NII の国際学術情報流通基盤整備事業（SPARC Japan）による「SPARC Japan NewsLetter」[55]がある。

2.9　雑誌

雑誌では他のツールほど最新の情報が掲載されることはないが，ブログなどとは異なり，あるテーマについてより大部で整理された（査読を通った）論考記事を定期的に読むことができる点が，他のツールにはないメリットである。

「D-Lib Magazine」[56]は，アメリカの非営利団体 Corporation for National Research Initiatives（CNRI）が 1995 年から刊行しているオープンアクセス雑誌で，電子図書館に関する論文・記事が掲載される。扱われるトピックは，技術的な話から事例報告まで多岐にわたっているが，最近では，学術コミュニケーションや機関リポジトリに関する論文も多数掲載されるようになっている。

「Ariadne」[57]は，イギリスの UKOLN が 1996 年から刊行しているオープンアクセス雑誌である。掲載される論文は，イギリスの大学図書館関係者によるものが多い。

「Learned Publishing」[58]は，イギリスの学会・専門協会出版協会（The Association of Learned and Professional Society Publishing : ALPSP）が SSP と共同で刊行している雑誌である。そのため，出版者関係者による論文が多く刊行されており，前 2 誌とは異なる性格を持つ雑誌である。

内容は，完全に研究よりではあるが，図書館情報学分野のコアジャーナルである「Journal of American Society for Information Science and Technology（JASIST）」[59]にも，関連する論文が掲載されることが特に多い。

日本語の雑誌では，「情報管理」[60]が重要な情報源である。特に，出版社へのインタビュー記事や学協会関係者による論考が掲載されることが多く，他の媒体では読むことができない記事が役に立つ。先に紹介した雑誌に掲載された論文の抄録の和訳も掲載されており，役に立つかもしれない。同誌のサイトで，無料で読むことができる。他にも，本誌「情報の科学と技術」[61]や「カレントアウェアネス」[62]は，「情報管理」ほど頻繁ではないが，オープンアクセス関連の記事が掲載される雑誌である。論文単位では，土屋氏の「学術情報流通の最新の動向：学術雑誌価格と電子ジャーナルの悩ましい将来」[63]も必ずおさえておきたい。

2.10　図書

最新の情報を入手するためには適していないが，オープンアクセスの概念や歴史的な展開を理解するためには，図書も欠かせない情報源である。図書に載っている情報は，最新状況とそぐわないものもある。しかし，これからオープンアクセスについて初めて勉強するという場合には，たとえば歴史的な経緯や重要な概念などを整理された形で学ぶことができ，これから見聞きする情報を理解・判断する際の枠組みを提供するという点で，不可欠なものである。

特に重要なのは，Willinsky 氏による「Access Principles: The Case for Open Access to Research and Scholarship」[64]と UCLA の Christine Borgman（クリスティーヌ・ボーグマン）氏の「Scholarship in the Digital Age : Information, Infrastructure, and the Internet」[65]の 2 冊である。「Access Principles」は，MIT 出版の Web サイト[66]から無料で PDF ファイルが入手できる（要登録）。

日本語の図書では，倉田氏の「学術情報流通とオープンアクセス」[67]と日本図書館情報学会研究委員会編の「学術情報流通と大学図書館」[68]が欠かせない。日本語でオープンアクセスについて初めて知ろうという場合は，この 2 冊は必読である。

出版社という点では，Chandos Publishing[69]が，オープンアクセス関係の図書を頻繁に出版している。内容は必ずしも良いとは言えない点が難だが，時機にかなったトピックの論考をまとまった形で提供しているという点では他にない出版社であり，定期的に確認する価値はある。

3. 終わりに

オープンアクセス関連の情報は，多くがウェブ上に無料で公開され，政府の報告書から個人的な発言まで，世界各国の各種情報を即座に入手できるようになっている点は非常に大きな利点である。インターネット登場以後，特に最近のブログ，Wiki，Twitter に代表されるユーザ参加型のサービスの普及により新しい情報収集・共有の方法が生まれている。これらのサービスを利用することで，情報収集自体だけではなく，その成果を共有する敷居が非常に低くなると同時に，メリットも大きくなっている。

特に，個人的経験からではあるが，各個人あるいは組織が，積極的に情報発信・共有を行うことを，二つの理由から推奨したい。一つは個人的利点に留まるが，筆者はこれまで Liblog JAPAN や Open Access Japan といったブログを運営することによって，結果として，オープンアクセス関係の出来事の個人的な整理・理解の促進，他者からの思いがけない情報提供（時にはお叱り），記事の執筆依頼などといった機会を得ることができた。もう一つの理由は，情報発信は，個人的利点にとどまらないという点である。最近は改善されてきているが，日本の各種取り組みは言語の問題もあってか国外ではそれほど知られていないのが実情であろう。日本の各関係者が国際的なネットワークを形成するためにも，日本のオープンアクセス関係の情報を英語で発信することも重要である。

一方で，オープンアクセス関連の情報収集を行う際に問題となるのは，1）処理しなければならない情報量が多いことと，2）日本の情報発信が不足しているという点にあると思われる。この二つの問題は容易に解決できるものではないが，本稿で紹介したツールを利用して，より多くの方々がオープンアクセスに関する情報を入手し，知識を深め自分の意見を積極的に発信することが広がること，さらにはこれらの取組みから，新しい形の情報収集・発信が生まれることを期待したい。

参　考　文　献

（Web 参照日はすべて 2010 年 2 月 20 日）

1) Harnad E-Print Archive and Psycoloquy and BBS Journal Archives. http://users.ecs.soton.ac.uk/harnad/.
2) Peter Suber. http://www.earlham.edu/~peters/hometoc.htm.
3) Stanford University School of Education. http://ed.stanford.edu/suse/faculty/displayRecord.php?suid=willinsk.
4) Scholarly Journals at the Crossroads: A Subversive Proposal for Electronic Publishing. http://www.arl.org/sc/subversive/.
5) Welcome to REFORM Website. http://cogsci.l.chiba-u.ac.jp/REFORM/.
6) 研究環境基盤部会　学術情報基盤作業部会：文部科学省. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/002-1/index.html.
7) 科学技術関係資料整備審議会｜国立国会図書館-National Diet Library. http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/council_technology.html.
8) Open Repositories. http://www.openrepositories.org/.
9) Open Access Conference - Berlin Declaration. http://oa.mpg.de/openaccess-berlin/berlindeclaration.html.
10) The SPARC Digital Repositories Meeting 2008 (SPARC). http://www.arl.org/sparc/meetings/ir08/.
11) To broaden awareness and understanding of Open Access - Open Access Week. http://www.openaccessweek.org/.
12) 国際学術情報流通基盤整備事業｜イベント情報. http://www.nii.ac.jp/sparc/event/.
13) 学術機関リポジトリ構築連携支援事業｜イベント情報. http://www.nii.ac.jp/irp/event/.
14) Digital Repository Federation - DRF wiki. http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/.
15) 株式会社カルチャー・ジャパン｜JCC｜本の保管／図書館総合展. http://www.j-c-c.co.jp/library/.
16) 学術情報基盤の今後の在り方について（報告）：文部科学省. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/06041015.htm.
17) 大学図書館の整備及び学術情報流通の在り方について（審議のまとめ）：文部科学省. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1282987.htm.
18) 研究環境基盤部会：文部科学省. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/010/index.html.
19) Stevan Harnad (AmSciForum) on Twitter. http://twitter.com/AmSciForum/.
20) PLoS (PLoS) on Twitter. http://twitter.com/plos/.
21) BioMed Central (BioMedCentral) on Twitter. http://twitter.com/BioMedCentral/.
22) Elsevier News (ElsevierNews) on Twitter. http://twitter.com/ElsevierNews/.
23) Springer LibraryZone (library_zone) on Twitter. http://twitter.com/library_zone/.
24) JISC (JISC) on Twitter. http://twitter.com/JISC/.

25) Wellcome Library (WellcomeLibrary) on Twitter. http://twitter.com/WellcomeLibrary/.
26) 国立国会図書館関西館図書館協力課（ca_tweet）on Twitter. http://twitter.com/ca_tweet/.
27) 津田大介．Twitter 社会論：新たなリアルタイム・ウェブの潮流．洋泉社．2009，191p.
28) Archives of AMERICAN-SCIENTIST-OPEN-ACCESS-FORUM@LISTSERVER.SIGMAXI.ORG. http://amsci-forum.amsci.org/archives/American-Scientist-Open-Access-Forum.html.
29) SPARC Open Access Newsletter & Forum (SPARC). http://www.arl.org/sparc/publications/soan/.
30) JISCmail - JISC-REPOSITORIES List at JISCMAIL. AC.UK. https://www.jiscmail.ac.uk/cgi-bin/webadmin?A0=JISC-REPOSITORIES
31) SPARC Open Access Newsletter & Forum (SPARC). https://arl.org/lists/sparc-ir/.
32) 機関リポジトリの設立・運営に関する公開メーリングリスト - DRF wiki. http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drf/index.php?機関リポジトリの設立・運営に関する公開メーリングリスト.
33) カレントアウェアネス-E｜カレントアウェアネス・ポータル. http://current.ndl.go.jp/cae/.
34) Peter Suber, Open Access News. http://www.earlham.edu/~peters/fos/fosblog.html.
35) DigitalKoans. http://digital-scholarship.org/digitalkoans/.
36) Open and Shut?. http://poynder.blogspot.com/.
37) The Scholarly Kitchen. http://scholarlykitchen.sspnet.org/.
38) ACADEMIC RESOURCE GUIDE (ARG) - ブログ版. http://d.hatena.ne.jp/arg/.
39) Open Access Japan｜オープンアクセスジャパン. http://www.openaccessjapan.com/.
40) JISC：Supporting education and research. http://www.jisc.ac.uk/.
41) Home｜Research Information Network. http://www.rin.ac.uk/.
42) SPARC. http://www.arl.org/sparc/.
43) Main Page - OAD. http://oad.simmons.edu/.
44) Welcome to the Registry of Open Access Repositories - Registry of Open Access Repositories. http://roar.eprints.org/.
45) OpenDOAR - Home Page - Directory of Open Access Repositories. http://www.opendoar.org/.
46) 学術機関リポジトリ構築連携支援事業. http://www.nii.ac.jp/irp/.
47) JAIRO：Japanese Institutional Repositories Online. http://jairo.nii.ac.jp/.
48) IRDB コンテンツ分析システム. http://irdb.nii.ac.jp/analysis/.
49) STI Updates｜情報管理 Web. http://johokanri.jp/stiupdates/.
50) カレントアウェアネス-R｜カレントアウェアネス・ポータル. http://current.ndl.go.jp/car/.
51) OA tracking project - OAD. http://oad.simmons.edu/oadwiki/OA_tracking_project.
52) タグ「オープンアクセス」を含む新着エントリー - はてなブックマーク．http://b.hatena.ne.jp/t/オープンアクセス.
53) SPARC enews (SPARC). http://www.arl.org/sparc/publications/enews/.
54) Home. http://www.scrpublishing.com/.
55) 国際学術情報流通基盤整備事業｜ドキュメント｜ニュースレター. http://www.nii.ac.jp/sparc/publications/newsletter/.
56) D-Lib Magazine. http://www.dlib.org/.
57) Ariadne Magazine. http://www.ariadne.ac.uk/.
58) ALPSP - Association of Learned and Professional Society Publishers. http://alpsp.publisher.ingentaconnect.com/content/alpsp/lp/.
59) JASIST. http://www.asis.org/jasist.html.
60) 情報管理｜情報管理 Web. http://johokanri.jp/journal/.
61) 情報の科学と技術. http://www.infosta.or.jp/journal/journal.html.
62) カレントアウェアネス ｜ カレントアウェアネス・ポータル. http://current.ndl.go.jp/ca/.
63) 土屋俊．学術情報流通の最新の動向：学術雑誌価格と電子ジャーナルの悩ましい将来．現在の図書館．2004，vol.42，no.1，p.3-30.
64) Willinsky, J. Access Principles: The Case for Open Access to Research and Scholarship. MIT Press, 2005, 307p.
65) Borgman, C. Scholarship in the Digital Age: Information, Infrastructure, and the Internet. MIT Press, 2007, 336p.
66) The Access Principle - The MIT Press. http://mitpress.mit.edu/catalog/item/default.asp?ttype=2&tid=10611.0.
67) 倉田敬子. 学術情報流通とオープンアクセス. 勁草書房, 2007, 196p.
68) 日本図書館情報学会研究委員会編．学術情報流通と大学図書館．勉成出版，2007，224p.
69) Woodhead Publishing [Chandos Publishing Home]. http://www.woodheadpublishing.com/en/ChandosHome.aspx.

Special feature: Open Access. Ten essential tools for keeping up with open access. Shinji MINE (Nagoya University, Library Studies, Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya, 464-8601 JAPAN)

Abstract: Open Access has attracted interests from around the world, and implementation of mandatory policy in government agencies and research institutions in USA and Europe has been growing for promoting Open Access. We need effective ways to gather information because of large volumes of information on Open Access. In this article, the author introduces ten essential tools (People, Event/Conference/Committee, Twitter, Listserve/Mail Magazine, Blog, Website. Social Bookmark, Newsletter, Journal/Magazine, and Book) to keep up with Open Access.

Keywords: open access / scholarly communication / institutional repositories / information gathering and dissemination / information resources